

ミステリの原稿は 夜中に徹夜で書こう

植草甚一

Poe must have
Written mysteries
in the midnight and---



植草甚一

早川書房

ミステリの原稿は夜中に徹夜で書こう

検印廃止

ミステリの原稿は
夜中に徹夜で書こう

昭和五十三年十一月十日 印刷
昭和五十三年十一月十五日 発行

定価 一三〇〇円

著 者 植 草 甚 一
う え く さ じん いち

発行者 早 川 清
は や がわ せい

発行所 株式 早 川 書 房
かぶしき かいしゃ は や がわ しょ

郵便番号 一〇〇一

東京都千代田区神田多町三ノ三

電話 東京(三三四)一五二(代)

振替番号 東京・六〇七九七番

乱丁・落丁本はお取替えいたします

印刷・製本／中央精版印刷株式会社

ミステリの原稿は夜中に徹夜で書こう

目次

1 ミステリの原稿は夜中に徹夜で書こう

こんどのクリスティーはどうだろうか 11

はたして「フアイヴ・スター・サスペンス」になっているかな 20

こんなに謙虚な推理作家はいなかった 29

雨降りだから原稿が書ける 38

ニューヨークの古本屋を歩く 41

本が着いたから読まなければならない 54

ミステリの本はABC順に並べやすい 61

マードックの新作「聖と俗のラブ・マシン」は主人公が推理作

家なので読みたくなった 68

イギリスの推理小説を書いたフランスの推理小説家 77

ミステリの連続講義が迫ってきたので 86

四十八階の小教室で復習してみよう 95

ついラカンの「盗まれた手紙」論の話がしたくなった

104

なぜニューヨークでミステリが読めなくなるんだらう

113

西武「ビー・イン」の仕事机に向かって

118

ニューヨークで感じた探偵小説的なもの

125

当分でたらめにミステリを読んでみよう

132

2 ニューヨークで買ったミステリの本

141

3 ミステリ・ガイド

マーク・サドラー「ここにて死す」

155

E・D・ホック「コンピュータ検察局」

156

J・P・マンシエット「狼が来た、城へ逃げろ」

157

ジョン・ゴードイ「サブウェイ・パニック」

158

P・D・ジェイムズ「女には向かない職業」

159

ハリイ・ケメルマン「日曜日ラビは家にいた」

160

ジョセフィン・テイ「時の娘」 161

レイモンド・チャンドラー「マローロ最後の事件」 163

スーヴェストル&アラン「ファントマ」 164

レイモン・マルロー「春の自殺者」 165

マーガレット・ミラー「これよりさき怪物領域」 166

マイクル・クライトン「大列車強盗」 167

ジョルジュ・シムノン「モンマルトルのメグレ」 169

アントニイ・ブライス「隠された栄光」 170

ジェローム・チャーリン「ショットガンを持つ男」 171

ジャック・フットレル「思考機械」 172

エド・マクベイン「糧」 173

ウィリアム・H・ハラハン「タリー家の呪い」 174

ジェイムズ・マクルーア「ステイム・ビッグ」 175

4 ちいさな教室で10回もやった探偵小説の歴史の講義

第1回 探偵小説の誕生 179

第2回	探偵小説研究の第一段階	206
第3回	探偵小説研究の第二段階	231
第4回	いくらか調子が出てきた段階	255
第5回	黄金時代に先立つ女流作家の活躍	270
第6回	よく知られすぎた発展段階	288
第7回	スパイ小説とその陣営	304
第8回	ハードボイルド派が誕生する	324
第9回	カフカの霧囲気の時代	345
最終回	雑談ばかりになった最終回	359

1 ミステリの原稿は夜中に徹夜で書こう

■こんどのクリスティはどうだろうか

いま読みかけのミステリが四冊ある。一冊ずつ片付けてしまえばいいのに鉢合わせになる面白さというのがミステリにはあるから、いつもこうなってしまうし、そこへまたほかのが割り込んだりするので途中で読んでつまらなくなつたのは、いつのまにか題名まで忘れてしまっている。ともかくまず四冊を読みあげ、どんな順序で印象を書いたら一番いいだろうと考えるがら銀座のイエナ洋書店で本を買っているとき、新入荷書のところのアガサ・クリスティの「運命の裏木戸」(Postern of Fate)が三冊かさねて置いてあるのが目についた。

そのとたん『こいつからいきたくない』と読まないうちからきめてしまったのは、このまえの「象は忘れない」と比較したくなったからである。ぼくは長いあいだクリスティにぎらいだった。といって「そして誰もいなくなつた」には感心した一人だが、それからあとがいけない。たいていのクリスティ作品は途中で読むのをやめることにした。その理由は文章がやさしすぎるし、なんだか中学生に舞い戻つたような気がしたり、こんなものに引つかつていたら、もっといい作品がゴロゴロころがっているのに読む時間がなくなつちゃうだろう。マイケル・イネスの難解な文章と取り組んだり、レイモンド・チャンドラーのスラングが多くて強烈な表現にぶつかっているほうが、ずうっと刺激があるじゃないか。戦後しばらくはこんなミステリの読みかたをしていたので、クリスティにぎらいになり、彼女の存在も無視してしまつた。

ちょうど昨年のいまごろだったが、やはりイエナ洋書店にクライム・クラブ版の「象は忘れない」(Elephant

Can Remember)が「運命の裏木戸」とおんなじ場所にかさねて置いてあった。それを見たとき読みたくなったのは、なぜ題名を「象は思い出すことができる」としたんだろう。それはたぶん四十年以上まえになるがエセル・ライナ・ホワイトが「象は忘れない」(Elephant Don't Forget)というサスペンス小説を書いているからにちがいない。そうしてこの作品はアメリカでは出版されなかったから邦訳に使った「象は忘れない」でかまわないわけだが、そんな好奇心が手つだってページをひろげさせることになったのだった。

ところがどうだろう。ぼくはビックリしてしまったのである。この邦訳が出るすこし前にペーパーバックが入荷した。そのときクリスティーがすきな飯島正さんは、寝るとき読む推理小説は軽くていいからペーパーバックにきめているので、すぐ買って読んでしまい、そのあとで試写室で顔を合わせたとき、こう言った。「きみも感心したそうだけれど、ぼくも気に入ったよ。というのもヌーボー・ロマンみたいなんだ。背景の書きかたがそう感じさせる。たとえばロブグリエなど建物の影が太陽の動きにつれて幾何学的に変化するあたりを細かく書いていくだろう。おんなじとは言えないけれど似ているんだよ」

いいことを言うなあ。ごぞんじのように背景は海に面した崖の上が中心舞台になっていて、仲よしの夫婦の死体が発見されたとき二人のあいだにピストルが落ちていた。十二年前の出来事であって合意の自殺だとみなされたが、解けない謎が残されている。いったい夫と妻のどっちがさきにピストルで相手を射ったんだろう。

こんなに魅力のある難問も珍しい。そうして最近のクリスティー作品に共通したテーマになっている「遠い過去」の罪は長い影をひく」というカトリック思想が解決へ向かうカギの重要な一つになっているが、ぼくがビックリしたのは、もうじきアガサおばあちゃんも八十二歳になるんだなあ、それなのにこんなにも頭のはたらきがシッカリしているだけでなく、文体が変化していることだった。

普通の推理小説では過去の出来事をこまかく再構成しようとするとき、どうしても説明的な文章になっていく。それがここでは重要な事がらのほとんど全部が会話で語られていくのである。こう言う推理小説では刑事と容疑者との対立などから生まれる会話形式の展開手法が多いから、当りまえのことだと思いかもしれないが、クリス

イーの場合は日常的な会話のやりとりのなかで、ごく自然に重要な事がらが説明されてしまうのだ。そうして会話をとおしてピストル心中事件にからむ恐怖感がふくれあがっていく。それがクライマックスに近づいたころは快感さえ感じさせたので不思議だった。カタルシスは恐怖や不安や苦痛から解放に向かうとき、そのあいだに快感という紙一重の壁を突き抜けた結果であるのかもしれない。

いったいクリスティー作品におけるこうした変化はいつから始まったのだろうか。ぼくはあわてて最近作を五編ペーパーバックで買おうと、それを発表年代順ではなく逆に読んでいった。そうすると一年まえ、二年まえ、三年まえというふうに、すこしずつ下手になっていったのである。一年ごとにくまなく読んできたという現象は逆に調べてみたほうがハッキリするのに気がついた。なかでも「終りなき夜に生れつく」というのはクリスティーとして最低のしろものだと考えたので、このへんで過去の作品を読むのはやめ、もっと暇があるときにしようと思ったのである。こんなわけで「運命の裏木戸」を「象は忘れない」と比較してみたくなった。

「運命の裏木戸」という題名の「裏木戸」は原題では「ポスターン」(Postern)となっていて、ぼくはこの単語を知らなかったので辞書をひろげた。「裏口」「裏門」となっている。けれど本の表紙を見ると、さしずめ軽井沢の別荘地付近で散見するような「裏木戸」の写真が使っているのだ。このとき「運命」は原題で「フェイト」(Fate)となっているが、「デステイニ」(Destiny)も「運命」だろう。どんなところが違うのかと思って手もとにあったハムリン辞書をひいてみると、この辞書は同義語にしんせつであって「運命」にはもう一つ「ドゥーム」(Doom)があるし、三つの単語はいくらか解釈のされかたが違っていることを知った。

その点を書き出してみると「フェイト」は出来事の非合理性と非人格的な面を強調していると同時に軽い響きを持つている。「デステイニ」は出来事が不可避的な方向へとむかいながら悪くはならないような場合に使うことが多い。そうして「ドゥーム」になると結末がかならず不幸をまねくか恐ろしい様相を呈するときに使われるのだと説明してある。

やっと「運命の裏木戸」をこぐれることになった。その庭内には前の所有者が「月桂荘」と名付けた家が立っていて、それを買った年寄り夫婦が忠実な召使と愛犬とを連れて引越してくる。デヴォンシャのハロークエイという村にあって軽井沢みたいなのところらしい。表紙写真の裏木戸越しに見える樹木の茂りかたでそう想像させるのだが、いっぽう「運命の裏木戸」という題名からはクリステイ作品の共通テーマである「遠い過去の罪は長い影をひく」という命題を連想させるので、これも「象は忘れない」みたいな暗いものだろうという先入観が入りこんでくる。ところが読んでいくうちに、どうやらそうした先入観は違っているような気がしてくるのだった。

そういえば「象は忘れない」を暗いものと言ったのも間違っているし、作中人物がどんな調子で話し合っていたか、思い出してみると彼らの会話にはユーモアがあった。それがこんどは暗さをすこしも感じさせないし、会話からはもつとずつとユーモアが出てくるようになった。筋にもふれないで先っ走りするのはまずいが、おとなしい調子でユーモアにとんだ会話が續いて、それが事件と関係し、場面が転じるとまた話し合っている調子がユーモアたっぷりになっていて、そのうち、おやユーモアそのものからサスペンスが生まれてくるな、こいつはどうしたことでだろうと考えてしまうことになる。

ほんとうは暗い物語なのだ。それがユーモアのため暗い感じをあたえない。だから読んでいるときの気持は「象は忘れない」とは正反対だといっている。けれどユーモア推理小説ではないのだ。たとえばこんなユーモアが飛び出す。「そうそう、あのスパイ事件のときだったね。お二人にはずいぶん迷惑をかけたなあ。あれは「MかNか」だったね。いや「NかMか」だったかな」といったセリフが出てくるから、クリステイ・ファンはよろこんでしまうだろう。

こんなユーモアのあとで『あの事件にはジェーン・フィッシュ（魚）という女が絡んでいたっけ。いやジェーン・ホエル（鯨）って言ったかな』『違いますよ。ジェーン・フィン（鱈）という名前でした』と言うのも笑ってしまうし『それできみはまたスパイをやるつもりなのかい』ときくと『そんな年じゃありませんよ。棺おけに片足つつ込んでいますから』と主人公は答える。そうすると『何を言うんだい。ある年齢をすぎると、いくらでも